

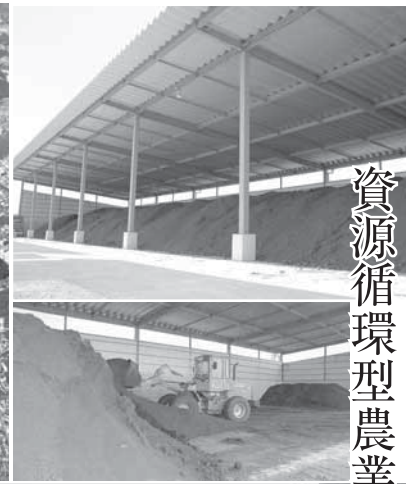
# 干拓畜産農家の挑戦

資源循環型農業への取り組み



24年の歳月を経て平成2年に完成した笠岡湾大干拓。今年4月には、目前に控えた岡山国体の会場となる笠岡総合体育館を含む笠岡総合スポーツ公園が完成。粗飼料基地の多目的活用に向けた動きも盛んに行われている。

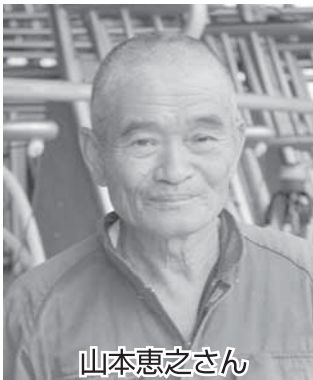
そんな中で、農業振興という本来の目的のため、新たな取り組みを始めた人たちがいる。資源循環型農業の確立に向けた挑戦。そんな夢にかける畜産農家たちだ。



平成二年三月、笠岡湾大干拓の完成と同時に、新たな大地に夢を求め、畜産農家の入植が始まった。当時は畜産農家一〇戸、飼養総頭数は一二〇〇頭程度であったが、現在では一六戸・五三〇〇頭に拡大している。市内全域での飼養頭数の八割強がこの干拓にしていることになる。

## ふん尿処理という課題

笠岡湾干拓畜産生産組合長で一次入植者の山本恵之さんは当時を振り返る。「これだけ広い干拓地。最初は土地ならいくらでもあると思っていたが、すぐにこのままでは牛が飼えなくなるという危機感に変わったよ。」



山本恵之さん

それぞれの農家が規模を拡大していった結果、家畜のふん尿処理という共通の悩みを

持たざるを得なくなった。

当時、畜産農家から出るふん尿は、耕種農家に一部を分けて残りはすべて自己所有の畑へ入れており、その畑は過剰施肥に悲鳴をあげ始めていた。

折しも、その解決に農家が思案しているときに、家畜排せつ物の適正処理を義務づける法律の制定に向けての動きが見え始めたのである。

## そして動き出す…

平成十一年十一月に「家畜排せつ物の適正処理と有効利用に関する法律」が施行された。これにより、堆肥の野積みはできなくなった。

施設準備の関係から、完全施行まで五年という猶予期間が設けられたものの、畜産農家は窮地に立たされていた。さらに、環境に配慮した営農を推進するため、干拓地内には完熟していない畜産ふん尿の搬入を慎むよう申し合わせている。

共同堆肥舎部会会長の東山基さんは語る。「共通課題の解消に向けて、畜産農家は行政

## 第54回全国農業コンクール 名誉賞

井波 恒雄さん（拓海町）



井波さんは、昭和六十一年に干拓地に入植。現在は総面積一・六五haの温室で、約二十品種のバラを年間約百五十万本生産しています。この大会では、出場者二十人中のトップで発表。通販会社との連携で販売ルートを確立し、中国雲南省の昆明に合弁会社を設立するなど、先進的な経営が高く評価されました。

受賞された井波さんは、「自分の経営を見直すことができました。これから一層頑張っていきたい。また、ほかの分野の発表も勉強になりました。機会があればそういったところへ視察に行き、今後の参考にしていきたい。」と話していました。